

【はじめに】

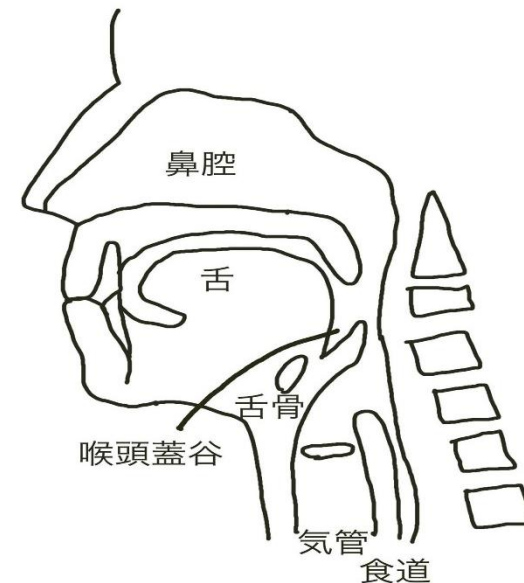
大阪府の肢体不自由支援学校では、福祉医療人材関係の派遣として数十時間、各学校に理学療法士や作業療法士、言語聴覚士などの巡回指導が行われている。（本校では今年60時間いただいている。）

学校によってはセラピストの資格を有している教員もいるが、あくまでも専門の福祉医療人材として常駐しているわけではない。

本校では、令和3年度から週1回、言語聴覚士の資格を有している教員（校内ST）が給食の時間に巡回する取り組みを行っている。
その中の1つの事例を報告する。

症例紹介と評価

- 小学部低学年
- 重度の知的障がい。フロッピーインファントで胃の噴門形成が未熟。
- 鼻咽腔閉鎖機能不全や舌根沈下がある。
- 下顎のコントロールが困難で、舌突出による二次的形態異常（前歯部開咬）がみられる。
- 舌の動きは前後のみで食べ物の送り込みに困難さがある。
- 嚥下力が弱く、食べ物や唾液が、梨状窩や喉頭蓋谷に残渣している。咽頭残留が食事終了後に気管に流れ込む。



摂食嚥下能力グレード

I 重症 経口不可	1	嚥下困難または不能、嚥下訓練適応なし
	2	基礎的嚥下訓練だけの適応あり
	3	条件が整えば誤嚥は減り、摂食訓練が可能
II 中等症 経口と補助栄養	4	楽しみとしての摂食は可能
	5	一部(1-2食)経口摂取
	6	3食経口摂取プラス補助栄養
III 軽症 経口のみ	7	嚥下食で、3食とも経口摂取
	8	特別に嚥下しにくい食品を除き、3食経口摂取
	9	常食の経口摂食可能、臨床的観察と指導要する
IV 正常	10	正常の摂食嚥下能力

本児に対しては 4「楽しみとしての摂食は可能」と評価した。

【具体的な方法】

① SPO2モニターを給食前から給食摂食時は装着する。

不顕性誤嚥の疑いがあることから、SPO2モニターの装着をお願いし、食べている際に5以上SPO2の値が下がった場合は誤嚥の可能性が強く、摂食を中止するようにお願いした。また保健室とも連携し養護教諭や看護師の見回りや付き添いを頻繁に行うように依頼した。



② 食形態をとんかつソース状にとろみ調整する。

口唇、下顎を閉じて嚥下することが不可で、舌は前後の動きのみがみられる。そのためマヨネーズ状だと送り込みが困難で、サラサラの液状だと誤嚥することが予想された。とんかつソース状にとろみ調整を行うように依頼した。



【具体的な方法】

③30° 仰臥位

リクライニングの角度を30°にした。本児の座位保持椅子はリクライニング角度が45°程度までしか調整できないので、後方にクッション椅子を置き倒れてしまわないよう工夫しながら30°に調整した。それと同時になるべく奥舌に食べ物を入れ、送り込みの障がいに対応した。



④下顎を動かすことと嚥下する際は口唇、下顎を閉じる

下顎の動きと舌、嚥下の動きは連動しやすい。そのため疲労してきた際には下顎を動かしてから嚥下のタイミングを見計らって口唇、下顎を閉じるよう介助をした。嚥下の際は口唇、下顎を閉鎖する介助を行うことで嚥下力を高めようとした。



【具体的な方法】

⑤交互嚥下の推奨

唾液や食べ物の咽頭残留があり、本児の無意識のうちに気管に流れ込んでいることも考えられる。そこでお茶や比較的サラリとした性状の食べ物を交互に嚥下することで咽頭残留の除去に努めるよう勧めた。

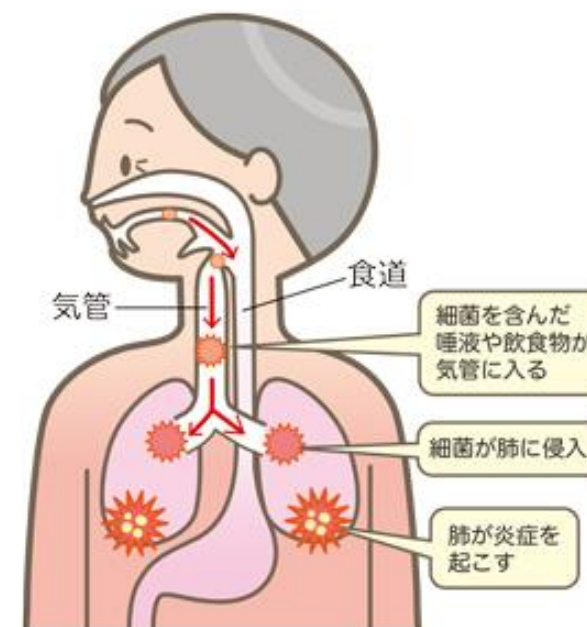


⑥嚥下反射促通手技の伝達

必要な栄養をすべて経口摂食で行っているが易疲労性があり、時間とともに嚥下反射が起こりにくくなってくる。そういった時には甲状軟骨から下顎下面に皮膚をさすることで嚥下反射が惹起（ひき出すこと。刺激などにより誘発すること）されやすくなる。また氷で冷やした金属スプーンを奥舌に当てることでも嚥下反射の惹起につながるなので、やりすぎには気を付けながら必要に応じて実施した。

一般的に誤嚥性肺炎の経路としては主に3つある。

- ①食事と関連した食べ物の誤嚥。
- ②唾液やプラークなど口腔内容物・分泌物の流入。
- ③胃食道逆流現象による胃の内容物の気管内への流入。



このうちの①に関して、学校では改善されたように思う。

また、担任教員だけで抱え込む心理的負担は軽減されたのではないか。

【まとめ】

家庭や医療機関との連携は主に担任教員が行うが、保護者の経口摂食への思いが並外れて強く、担任教員の心理的負担は大きかった。保健室や校内STとしては「食事と関連した食べ物の誤嚥」への介入が主となり、担任教員の心理的負担を大きく軽減するにはいたらなかった。

摂食指導に限らず、医療の発達により教員に求められることも高度になってきている。そのような児童生徒を担当した際の教員の心理的負担は大きい。

今回は校内STによる週1度の巡回ではあるが、介入することで担任教員だけで困難な事例を抱えるのではなく、広く学校全体で問題を共有するきっかけになったように感じている。